



享保仁政錄

推

^ 13  
3364  
14





茶園紀政源巻之三終

目録

一 勝川源守存家の中書屋の及

大是越前守と在長也門後の事

并其の師祖全孝の自林氏書の文



門 八 12  
3364  
卷 14

享保仁政詠大和

享子ニ享享保詠詠

享保詠詠大和及

氏及五節

詠詠

享保仁政詠書之指尺

大正十年八月廿  
木大學出版部

享保詠詠大和及  
享保詠詠大和及

享保詠詠大和及

享保詠詠大和及

享保詠詠大和及

享保詠詠大和及

享保詠詠大和及

若陽在流く宿屋にあり  
まの暇をとり川をみる面会  
事しつゝまはる今既なる面會  
とげんとて時の家を流す  
原原を傳はる河をたぬ  
上利の新所村なる所を  
日克し梅乃秋ヶ谷なる所を  
中在道へ向ふ事由を次介

園名や七ヶ集りあり  
肉作しつゝもや  
志傳の張の向ふあり  
是よりお梅の  
あつゝも  
この作のせり  
定方なる所の  
女と川を流す

あはれなるまゝに一日たすけぬるま  
りゆのまじし中より係りつを  
我れとて捨れ置あしむる事をも  
たしめし居りてあがたれ  
のまじしあしむる事をも  
あはれなるまゝに一日たすけぬるま  
りゆのまじし中より係りつを  
我れとて捨れ置あしむる事をも  
たしめし居りてあがたれ  
のまじしあしむる事をも

あはれなるまゝに一日たすけぬるま  
りゆのまじし中より係りつを  
我れとて捨れ置あしむる事をも  
たしめし居りてあがたれ  
のまじしあしむる事をも  
あはれなるまゝに一日たすけぬるま  
りゆのまじし中より係りつを  
我れとて捨れ置あしむる事をも  
たしめし居りてあがたれ  
のまじしあしむる事をも









よまひつゝはるの海に連るる  
まゝにたゞしき心もせ  
かみちの道に及ぶ海に右に渡る  
海を 男も女も何れも  
ゆりてはまゝの心も  
かみちの道に及ぶ海に右に渡る  
り存るるまゝの心も  
しはるる心も何れも  
男も女も何れも  
秀長女房に  
しはるる心も何れも  
しはるる心も何れも  
しはるる心も何れも  
しはるる心も何れも  
しはるる心も何れも  
しはるる心も何れも  
しはるる心も何れも

てきたてし  
山崎のまきへいよちるる身

よるいへんは往  
まふまへにけり

まをわし  
まがわりの

ま  
まの

くわん  
まの

行  
まの

ま  
まの

ま  
まの

ま  
まの

ま  
まの

ま  
まの

ま  
まの

ま  
まの

ま  
まの

ま  
まの

ま  
まの

と云ふ人か  
船中へて裁氣利なる及思得家の  
此をうののりあぬに定むる  
もあつて板の以て爲すつぎ  
そつとほめまき平へ出下り  
上裁ありとの中へ所へ降  
引候へしめあめも裁氣  
ちる及度次第に候中節よめ人  
せと白紙さきへしとらうへし降

くあ  
之風まきへしん取の解し候  
きりし作付らむと意あそき  
こまひのよめしと  
管を安んずるに候  
其うまが目たに候この人  
合中とのし候  
あつとらうに候  
此の仕とらうのよめし



白鳥の元をせしむ身とて  
ありの心もあはれ  
役人にもあはれ  
白鳥の心もあはれ  
之代に  
云ん  
悪母の心もあはれ  
白鳥の心もあはれ  
家  
成  
中  
上  
白  
中  
中  
中  
中

家  
成  
中  
上  
白  
中  
中  
中  
中







とてくはぢ〜 疾ふ月あつ〜  
んくはぢ〜 疾ふ月あつ〜  
とてくはぢ〜 疾ふ月あつ〜  
明あつ〜 疾ふ月あつ〜  
の疾ふ月あつ〜 疾ふ月あつ〜  
上〜 疾ふ月あつ〜  
〜 疾ふ月あつ〜  
疾ふ月あつ〜 疾ふ月あつ〜

今も疾〜 疾ふ月あつ〜  
申〜 疾ふ月あつ〜  
疾〜 疾ふ月あつ〜  
おらが疾〜 疾ふ月あつ〜  
疾〜 疾ふ月あつ〜  
〜 疾ふ月あつ〜  
疾〜 疾ふ月あつ〜  
疾〜 疾ふ月あつ〜  
疾〜 疾ふ月あつ〜



舟の國華としくはあらぬとて  
月ひしきつにあらざるは  
夢の國華とてはあらざる  
物もやうに度由守ある  
下金と少粒とすまらぬ  
くらよありとてなほあり  
中とて國華とてはあらざる  
りやとて國華とてはあらざる  
流なりとて人なりとて  
も親の國華とてはあらざる  
國華とてはあらざる  
しとて國華とてはあらざる  
とて國華とてはあらざる  
國華とてはあらざる  
しとて國華とてはあらざる

是れ  
りし本のおらひのいふ  
まう三時集りして  
しき物をつく  
其情をさう  
六つ時色し  
し  
らるるい  
榎のき傷ふ  
まあふ  
際らむ  
順の孝の  
し  
とら又作  
く我が新  
之方や

其情を

事書

三時集

つく

さう

し

し

い

花を

榎

まあ

順

し

又

我が

之方

飛ぶを我は愛用し飛ぶが  
ら毒を管ら四とと中し  
る長林の公をあたんとてんまをば  
金が一か子少む飛るる根の  
そ——を度結ますまのあ  
りの飛ぬい山——を母は  
あ——のいぶくく——をん  
情業をく——女席もあら

たがどろろりり——をぬ今度  
人を整——が娘め——と境  
織をせぬ——りまを部あを  
もん花がりのよとぬあはれ我も  
堂ととあわらぬ、あやののめ  
さうりせしるが自然——あやの  
非人あ白物とせ——日書  
ふふああせと——や——らぬ

くまがきこよみみせら

の口書も落ししやせおろしてよ  
めしきもまふい争をより救目の  
る あま 上く情甚なりとくけ  
予しきいぬ拒の終なりおろし  
入るるとあせりきしん あま 命  
おろし入るるといふも あま 命  
執事あつたふ あま 命 あま 命  
ともしきふふい あま 命

執事あつたふ あま 命 あま 命  
あま あま 命 あま 命 あま 命  
ともしきふふい あま 命  
せしき あま 命 あま 命 あま 命  
天下の役人 あま 命 あま 命  
川の活 あま 命 あま 命  
執事あつたふ あま 命 あま 命  
何ぞ あま 命 あま 命

此館後ありし物事の執事ありし  
天竺のゆりし後、  
織土のんしありま中しき  
立格よしし白川より  
すあ丸社らしきとありせあり  
い思入しるる事し平伏し  
りふありとよしし役人  
からししが伊勢守の忠告あり

遠くまでいしありし  
しきもむ取の事  
又しは仕も  
ありあり



孝保仁政條ももも

